

脱天然資源依存の英国園芸  
—ピート削減に向けた王認園芸協会(RHS)の取り組みを中心に—

岩本 陽児

(和光大学 現代人間学部 iwamoto@wako.ac.jp)

English Gardening Towards Sustainability,  
with Special Reference to the Royal Horticultural Society's  
Campaign for Peat Free Horticulture.

IWAMOTO Yohji

associate professor in adult/community education, Wako University, Tokyo

**Abstract**

This article focuses on the issue of peat use in horticulture. After recalling my personal experiences in England over past two decades, including an emergence in the market of peat-free composts, the RHS campaign targeting substantial reduction of peat will be examined in detail via its own internet site. The use of sphagnum moss, tree fern product and osmunda roots, all still available in the US market, will additionally be discussed, too. This article recognises a possible limit of efforts taken by a single country as this is an international subject, and suggests the importance of the EU action for regulating European peat trade.

はじめに

私は園芸というすぐれて文化的な営みが、英国で環境負荷の少ない方向にシフトしつつあることに関心を持っている。観賞価値の高い野生植物の山取りを違法化して、増殖品を市場に流通させる取り組みについてはすでに本誌第5号で報告したが(岩本、2008)、今回は培養土などの資材に注目したい。この領域でも持続可能性がさらに追求されている。本稿ではまずはじめに

私自身の英国での経験を振り返り、続いて王認園芸協会のサイトを紹介する形で、ともすれば個人的な趣味と見なされがちな園芸の、社会に及ぼすインパクトをこの団体が自覚しつつ、関係諸機関と連携しながら広い意味での市民教育に当たっていることを確認したい。王認園芸協会は単なる趣味家の交流・親睦や植物栽培法の研究・教育にとどまらず、民主主義社会のオピニオンリーダーとしての役割も果たしているのである<sup>1)</sup>。

## I 英国コンポスト事情

かれこれ20年あまりの昔、NHK深夜テレビで英国のガーデニング番組を吹き替え放送していたことがあった。苗をポットに植え付ける様子とは見ると、底網・鉢かけを置くでもなくゴロ土を敷くでもなく、ポットの中に据えた苗の根回りに用土を無造作に押し込み、形を整えてはい一丁あがりと簡便であった。まだ日本では簡便な袋詰め混合培養土がそれほど普及しておらず、赤玉土7に腐葉土3だの、水はけを好むものには川砂を、と言っていた当時のことである。「これは英国式のやり方で、日本の気候風土には必ずしも適合しないかもしれない」と断りを入れる字幕が出ていたと記憶する。

その後程なく、私は留学の機会を与えられて英国に行き、あの時テレビで放映されていたのがピートをベースにした培養土（コンポスト）と知った。球根のアマリリスも、英国人が好んで暖かい台所の流しの窓辺に飾るセントポーリアも、温室育ちのアンセリウムも、これらは大概オランダから安く輸入されていたのだが、繊維が3センチほどと長く粗いピートに植え付けられていた。パーライトを若干混じたものもあった。

袋詰めの園芸用培養土は堆肥と同様にコンポストの名で呼ばれていたが、目の細かい、いわゆるピートモスを使った製品が多かった。わずかに湿った状態で袋詰めになっており、ところどころにミズゴケが元の形で確認できた。プラスチックのポットにこれをひとつかみほど入れ、苗や球根をおさめてから、隙間にコンポストを軽く詰め込むと、植え付け、植え替えは簡単だった。ポットの底には直径7ミリほどの穴がいくつか開いていたが、湿ったピート系培養土だとこぼれ落ちることもそう気にならない。これに錠剤状や棒状の固形肥料を組み合わせれば、灌水だけでほとんど世話要らずだった。

小型のポットはおしなべて軽いプラスチック製で、日本で普通に見る黒のビニールポットや素焼き鉢、駄温鉢は見なかった。通気性のないプラ鉢は灌水の頻度も少なくすみ、ピート系培養土との相性がよかった。大鉢にはテラコッタもあったが、イタリア製の普及品は冬季、屋外で凍結した鉢底からざくざくに剥離する懸念があった。そうならないという、堅手の製品も販売されていたが、やや高価であった。特徴的だったのが、日本製なら鉢底に必ず三箇所ある排水用のくり欠きが英国内に流通しているテラコッタポットにはなかったこと。棚に置く分には問題ない。地面に直接置くと排水が悪いので、そういう場合には3つ組のテラコッタ片をすげる習慣と知った。これの凝ったものは、猫足ならぬ、ライオンの足先をかたどっていた。1990年代半ばから、釉薬のかかった厚手のマレーシア産陶器鉢が普及した。

春になると決まって店頭に並ぶ安価な「トマトバッグ」も、中身はほとんどピートモス単用と見えた。これは、細長いビニール袋の中に培養土を詰めたもので、そのまま裏庭の陽だまりに並べて、印刷された点線に沿って穴を開け、トマトを植えつけて灌水する。元肥も施用済みというまことに簡便な資材で、ワンシーズンの使い捨て用だった。成長期に時折、「トマトフィード」と呼ばれる褐色の総合液肥を希釈して与えれば、トマトが霜枯れるまで楽しめた。

このトマトフィードは、赤いプラスチック容器に入ったやや磷酸・カリ分の多い肥料で、製造元は何社もあったが、トマトに限らず、汎用液肥の代名詞として普及していた。商品の差異化は、日本ほどには進んでいなかった。

水はけ、水持ちのよいピート系培養土は、ハンギングバスケットにも相性がよかった。灌水した水がこぼれても、泥のにごり水でないため、下にしみや汚れを作らない特長があった。

このように、ピート系培養土はたいへん重宝なものだったが、欠点もふたつあった。ひとつに、よく知られた、極端に乾燥させると水をはじく性質。こうなると、バケツの水に鉢ごと漬けておくしかない。もうひとつが、屋外で1シーズン使用すると物理性が極端に悪くなることだった。すなわち分解が進み、弾力がなくなって膨潤さも失われ、べったりした泥状になってしまう

う。こうなったら、もう鉢植えには使えない。拙宅は庭土が風化白亜起源の重粘土だったので、植え替え後の古土は、バラの根元の土壌改良のつもりで、毎年使い捨てしていた。どの家庭でも、同様だったろうと思う。

こうした状況に変化の兆しが現れたのが、1990年代も終わり近くになってからのことである。ピートフリー(ピート不使用)の表示がある袋詰めコンポストを、王認園芸協会やナショナル・トラストのガーデンセンターで見えるようになった。従来品に比べると、ピート不使用製品は価格にして5割増し。しかも、同じ容量でもずしりと重かった。60リットルの大袋ともなると非常に重く、車のトランクに入れたり出したりが難儀なほどだった。

中身を見ると、1~3センチの長さの半発酵させた黒っぽい木材繊維に粗砂が混じてあった。灌水後には黒い汁が流れ出し、乾燥すると白っぽくなった。乾燥した鉢の表面が強風に飛ばされることもあった。野鳥もよく遊びに来て、表土をほじくりながら散らかしていった。完成度ではピート系培養土に及ばない代用品との印象を与えるものだった。

こうやって市場に登場したピート不使用の培養土は、はじめこそ環境意識と可処分所得が高い客層を狙っていたかのようにだったが、数年しないうちにほとんどのガーデンセンターで見られるようになり、普及が進んだ。トマトバッグにもピート不使用のものが出てきて、やはり高くて重かった。しかし、一般のガーデンセンターではピート系培養土の販売も相変わらずで、アイルランド産の酸度無調整100パーセントピートも、軽量なため100リットルや120リットルの大型包装で売られていることに変わりはなかった。酸性を好む植物用と思い、私は使用しなかった。

2009年になって、在外研究の機会を和光大学から与えられて再度英国に渡り、ひとつ驚いたことがあった。街の中心街にある99ペンスショップで、ピート不使用コンポストが売られていたのである。90年代の終わり近くになって出現した、100円ショップの英国版ともいえるこうした店舗は、労働者世帯を主要な客層としているため影響が大きい。ところが、2011年のシーズンに同じ店舗を見たところ、ピート系の従来品に戻っていた。不評だったの

か、さもなくば仕入れの事情によるものだったのか。問題は、すんなりとはいかないようである。

## II ピート削減に向けたRHSの取り組み

本節では、王認園芸協会のインターネットサイトから、この世界最大の園芸団体がピート使用削減に対してどのような考えをもっており、どのような取り組みを行っているのかを見ることとした。

RHSホームページからガーデニングのページに進むと、ページの左側にいくつかの項目が並んでいる。そこに表示されている「サステナブル・ガーデニング」をクリックするとたどり着くのが以下に紹介するページである。ピート採掘の実態と、それが環境に与える影響を市民に知らせ、王認園芸協会自身の減ピートの取り組みについて報告している。ピートを現在のように信頼できる培養土とすることに数十年を要したのだから、ピート代替品の開発にもそれなりの時間がかかると、息の長い取り組みの必要を訴えている点が印象深い。内容的な重複も見られるが、そのままにしている。

なお、ところどころ意識しているので、ご注意いただきたい。

### 1 ピートと環境<sup>2)</sup>

ガーデニング用ピートの商業採掘は、生物多様性、炭素貯蔵、洪水の危機管理に重要な泥炭湿地(ピートランド)の破壊をもたらす。

●泥炭湿地は植物が水浸しの状態に置かれて完全には分解されない場所に生じる。この、部分的に分解された植物体がピートとなるが、堆積量は毎年1ミリメートル以下ということが多い。

●また、泥炭湿地は、希少な動植物が繁殖する独特な価値ある環境を作り出している。ピートの採掘はこうした動植物をそこない、生物多様性の喪失をもたらす。

●泥炭湿地は炭素の重要な貯蔵庫である。というのも、植物が完全には分解しないからで、植物中の炭素はピート中に封じ込められた状態となる。ピートが採掘され、ガーデンで使用されると、貯蔵されていた炭素は温室効果ガスである二酸化炭素として放出される。

●同様に泥炭湿地は地球規模での水循環にも極めて重要な役割を果たしている。泥炭湿地の破壊は洪水のリスク増大を導くものだ。

●英国全土でアマチュア園芸が200万立方メートルのピートを消費している。

●ピートの使用削減が進まない要因はいくつかある。使い方が証明された馴染み深い代替の培養土、とりわけ種蒔き用土や、例えばツツジ科といった特定の植物群のための用土がないこと、ピート採掘の影響への市民の理解のレベルの低さなどである。

## ●文献

Defra 2010

Monitoring of the horticultural use of peat and progress towards the UK biodiversity Action Plan target. Department for Environment, Food and Rural Affairs, London, pp. 19.

## 2 もっとくわしくピートについて<sup>3)</sup>

ピートは分解が不完全な植物遺体、主にスゲ類、草、葦やこけからなっている。天然の腐敗過程が水没による酸欠状態におかれた場合、年ごとの湿地植物の遺存体が圧縮されてピートを形成する。その過程は緩慢で、毎年増加する層の厚みは平均1ミリ以下と計算されている。ピートはその特性から、園芸では理想的な培養土として使用されている。

どこから来ているのか？

現存の泥炭湿地は、地球上の大地と淡水の表面の4百万平方キロを覆っていて、世界中で見出されている。しかし現在では、ピートの形成は主に北半球の温帯域で行われている。

全英で泥炭湿地は160万ヘクタールある。その95パーセントは高地ブランケットbogで、残りが低地レイズトbogとなっている。すべての種類のピートが商業採掘向きとは限らない。園芸用製品として大量に採取されているのは、長い年月を経て深い層を成すミズゴケピートからなる低地レイズトbog。ナズらの2009年の研究によれば、「培養土の製造業者はわずかに分解した状態のピートを好んで使っているが、それは泥炭湿地で採掘できるピート総量のわずか2割にすぎない」。全英に7万ヘクタールある低地レイズトbogのうち、手付かずの状態または自然に近い状態にあるのは3800~8000ヘクタールと推定されている。

商業的なピート採掘に適しているかどうかは、市場への近さ、道路からの距離、品質など多くの要因によって決まる。そのため、低地レイズトbogは採掘業者の標的となっている。地球規模でのピート総量で商業的採掘に適したものが、不適なものよりもずっと少ないのもこうした理由によるもので、再生量の数値はよくよく吟味しなくてはならない。地球規模での再生レートは、地球規模でのピート総量にもとづいたもので、商業的に採掘可能なピート総量にもとづくものではない。シルストラは2001年に「商業的に手の届かない場所で育っているピートは、再生可能な資源を補充するとは言えない」と述べている。環境エージェンシー(政府環境局)によれば、「自然の再生速度は遅く、人類のタイムスケールでのピートの損失は取り返しのつくものではない」。

## ピートの採掘と使用

泥炭湿地は生成に数千年かかるため、もし採掘により悪影響をこうむるようなことがあれば、取り返しがつかない。採掘跡地は埋め立てにより魅力的な湿地帯となるが、それは泥炭湿地の再創造ではない。ピート

が年にわずか1ミリずつ形成されるのに対し、ピート採掘機は年に22センチを取り除く。深さ10メートルのピートの生成には1万年を要するが、採掘すれば50年足らずでなくなってしまう。こうした時間の物差しを心に留めるなら、回復・復原した泥炭湿地を示して見せることは不可能と分かる。もし泥炭湿地が復旧できるとしても、保存のほうが復原よりも安くつくことを思い起こすべきである。

デフラ(Defra、政府環境食料田園庁)の2010年の推計によると、毎年296万立方メートルのピートが全英で使用されている。その99パーセントが培養土で、69パーセントはガーデナーが使っている。また、全英で使われているピートのうち68パーセントは他の国々、たとえばアイルランド共和国やバルト諸国からの輸入である。

## 法制

最近まで、園芸は英国政府による2010年までのピート使用削減目標の焦点だった。主要な小売業者すなわちB&Q、ホームベース、フォーカス、マークス&スペンサーは、これらの目標またはそれ以上のことを達成しようと努力した。こうしたリーダーシップが苗圃会社(ナーセリー)を勇気付け、ピート使用から遠ざけるであろうと期待された。

培養土イニシアティブ(Growing Media Initiative)、すなわち園芸取引協会、培養土協会、小売業者、デフラ、王認鳥類保護協会(RSPB)、王認園芸協会(RHS)が関与する計画は、政府目標と歩調を揃え、英国園芸産業のピート使用削減支援を目的としている。

EUも、泥炭湿地保存への関心を共有している。泥炭湿地の大半は今や大変貴重なものとなっており、それゆえに特別保全区等の指定を受けつつある。加盟諸国は泥炭湿地を保護するよう要請されている。EUもまた、現状保存が復原よりも安上がりであるとの見解を提唱している。EU外でも泥炭湿地の環境保全上の特別な地位が次第に認識されるようになって

きているが、立法措置の効果には国によりばらつきがある。

#### デフラのコンサルテーション

2010年を達成目標年としたデフラのピート使用削減目標は、当初の計画通りにはすすまなかった。そのためデフラは、2010年12月17日に、ピートの園芸使用へのコンサルテーションの改訂版を打ち出した。

このコンサルテーションの要点は、デフラがアマチュア市場とプロ市場に対して、違った取り組みが必要と認識した点である。ピートはアマチュア用の袋詰め培養土としては2020年までに、生産者向けとしては2030年までにガーデニング市場から姿を消すことを提案している。

#### 泥炭湿地保護のための共有された関心

下記機関は野生動物の生育環境としての泥炭湿地の保護のために関心を共有している。

王認鳥類保護協会 The Royal Society for the Protection of Birds,  
The Lodge, Sandy, Beds, SG19 2DL, tel 01767 680551

ナショナル・トラスト、保全部門 The National Trust,  
Conservation Department, Heelis, Kemble Drive, Swindon SN2 2NA tel  
01793 817400

プラントライフ Plantlife,  
14 Rolleston Street, Salisbury, Wiltshire, SP1 1DX, tel 01722 342730

野生動物トラスト The Wildlife Trusts,  
The Kiln, Waterside, Mather Road, Newark, Notts, NG24 1WT, tel  
01636 677711

地球の友 Friends of the Earth,  
26-28 Underwood Street, London, N1 7JQ, tel 0207 490 1555

ナチュラル・イングランド Natural England,  
Northminster House, Peterborough, PE1 1UA, tel 0845 600 3078

ウェールズ田園協議会 Countryside Council for Wales,

Maes-y-Ffynnon, Penrhosgarnedd, Bangor, LL57 2DW, tel 0845 1306229

スコットランド自然遺産 Scottish Natural Heritage,  
Silvan Hs, 3rd Floor East, 231 Corstorphine Rd, Edinburgh EH12 7AT  
tel 0131 3162300

連合自然保全委員会 Joint Nature Conservation Committee,  
Monkstone House, City Road, Peterborough, PE1 1JY, tel 01733 562626

培養土イニシアティブ Growing Media Initiative  
The HTA, 19 High Street, Theale, Reading RG7 5AH tel 0118 930 3132

## 文献

Naasz, Caron, Legault and Pichette (2009)

Efficiency factors for bark substrates: biostability, aeration or phytotoxicity. Soil Science Society of America Journal, 73 (3) 780-791.

Schilstra, A.J. (2001) How sustainable is the use of peat for commercial energy production? Ecological Economics, 39 285-293. also available online at [www.rhs.org.uk/publications](http://www.rhs.org.uk/publications)

Defra. (2010).

Monitoring of the horticultural use of peat and progress towards the UK biodiversity Action Plan target. Department for Environment, Food and Rural Affairs, London, pp. 19.

## 3 ピートの代替品<sup>4)</sup>

樹皮、木質繊維、ヤシがら繊維、バイオ固形物、わらび、グリーンコンポストなどの素材を使ったピート代替品が開発されつつある。素材の特性が違うために製品開発には時間がかかりそうである。ガーデナーは、製品ごとに管理手法が違うことも知っておかなくてはならない。培養土の

開発は、今や挿し木用といった用途特化を目標とするようになってきている。

高品質のピートを単用または主原料とした培養土を使って園芸技術を完璧にすべく、数十年にも及ぶ研究が続けられてきた。同様に、ピート代替品の使用にあたっては、調整には時間がかかると予想される。

代替品の中には、地域で回収された「ゴミ」原料を処理した培養材から作られているものもある。地域の環境にやさしいピート代替品の開発を、外国のピート採掘に代わるものとして応援することで、消費者である園芸愛好家たちは林業や堆肥製造など多くの国内産業に利益を与えている。輸送による環境への影響も低減される。

ツツジ科植物など特定の種類用、また汎用培養土といったピート代替品の開発には、より多大な努力が求められる。代替品の多くはアルカリ性で、酸性用土を必要とするツツジ科植物には不適である。従来製品の汎用培養土では様々な植物が育てられてきたが、肥料分の集積の仕方が異なるところに、代替汎用培養土開発の難しさがある。重要な第一歩として、多くの業者がピート量を減じた混合培養土を開発した。この手法によるピートの段階的廃止のためには、利用できる製品の質が維持されていなくてはならない。

#### 王認園芸協会の比較公開実験

王認園芸協会では、自園でピートと代替品の比較実験を数多く行っている。パーク、木質繊維、ヤシ殻繊維、グリーンコンポスト、バイオ固形物といった多くの素材が、異なった状況下に置かれた多種の鑑賞植物と野菜の栽培について評価された。この公開実験はそれぞれの製品の利点と課題についてのファーストハンドの情報を提供し、ピート代替品で育てた植物の大多数がピートで育てたものに遜色がないことを示している。公開実験から、ピート代替品の取り扱いがピートと同じにはできな

いことも明らかになった。代替品のあるものは植物を選び、すべての植物を同じように生育させるものではないことも分かった。別の製品では、植物の生育を促進したり遅らせたりすることもあり、植物の管理が煩雑であった。最善の結果を得ようと思うなら、ガーデナーは新しい培養土を試すときには、しばらくの慣らし期間を見込んでおくべきだろう。

ピート代替培養土の使用に当たっては、灌水や施肥についてと同様、それらが最適とする植物の種類がパッケージに書いてあればよく読んで、その勧めに従うことである。

園芸家がピートを完全に受け入れるまでに数十年がかかった。ピート代替品を使用するには、製造業者にとっても植物管理にとってもより一層の努力を求めることになるだろうが、既存の優れた製品を含むピート不使用製品は改善されつつある。

伝統的にピートは土壌改良剤やマルチ（根元敷き）材資としても使われてきたが、ピートよりも優れた素材がある。ピートは、王認園芸協会のガーデンでは、土壌改良材やマルチには使われていない。土壌は、完熟厩肥や植物性堆肥の施用で改良できる。両者とも、木材チップ、かなな屑、樹皮その他の資材と混和してマルチにも使用できる。

#### 4 王認園芸協会のピートポリシー<sup>5)</sup>

王認園芸協会も、ピート湿地の生息環境で行われている地球規模のピート採掘の影響を出来るだけ少なくするためにピート使用を削減すべきという市民の思いを共有している。王認園芸協会は、現今の商業的ピート採掘の速度はピート地帯の環境を修復不可能な状況にいたるほどのものであり、環境的に持続不可能であると認識している。

優れたピート代替品は多い。大きくふたつに分けて、ピート完全不使用のものと同減ピートのものがある。ラベル表示やパッケージの情報が改

善されれば、ガーデナーたちは、ピート代替品についてより理解したうえで選択することが出来るだろう。

王認園芸協会は2010年までに培養土と土壤改良材におけるピートの使用を9割削減した。これはデフラの目標を上回る成果である。2010年当時の培養土、土壤改良材すべてにおけるピートの割合は、0.7パーセント未満である。

### RHSポリシーの要約

王認園芸協会は、野生生物の生息地におけるピート採掘による地球環境への影響の懸念を市民と共有し、ピートボグの生息環境への手厚い保護の必要性を十分に支持する。

王認園芸協会はガーデナーによる持続可能なピート代替品の使用を推奨し、培養土と土壤改良材へのピート使用を2010年までに9割削減するとのデフラの目標を上回る成果を挙げた。私たちの培養土と土壤改良材全体でのピート使用は0.7%以下である。王認園芸協会はピートを土壤改良材としてはまったく使っていない。私たちの狙いは、繁殖用と、少数の専門分化した植物コレクション維持のために使われるピート系培養土の使用をさらに減らすことにある。2010年に、ピートは私たちの培養資材の約3パーセントであった。

王認園芸協会は2020年までにアマチュアガーデナーによるピート使用を完全になくすという、デフラ目標の達成に向けた歩みを支援する。

王認園芸協会は、いまピートに代わる有効な代替品が大概の培養資材につき利用可能であると信じているが、持続可能なピート代替品がさらに研究開発されるべきであるという認識のもとに、ピート代替品の使用にむけた研究を支持し応援している。

王認園芸協会はピートの代替培養土の生育結果がピート同様である場合には、その使用についてのガイダンスを提供している。

王認園芸協会は、ピートを用土の主要な組成としたり、マルチ資材とするために購入することは受け入れない。RHSフラワーショーで、展示の演出にピートを使うことを禁じている。

王認園芸協会は、園芸用にピートを販売している小売店には、ガーデナーに対し持続可能な素材によるピート不使用の代替品も選べるようにしてもらいたいと要請している。RHSエンタープライズが経営するプラントセンターでは、代替となるピート不使用製品を、見た目にも分かりやすく、値ごろな価格で販売している。RHSプラントファインダーを使うことで、「スペシアリティ」の項目にピートを使用しないで繁殖された植物を探ることが出来る。しかしながら、それは苗圃会社が販売している植物すべてがピート不使用であるとお墨付きではない。

王認園芸協会はガーデナーが了解の上で選択できるよう、培養土とその組成、使用方法についてはより明瞭に表示すべきだと考えている。王認園芸協会は小売業者、製造業者、政府機関、非政府団体、生産者および環境保全に関心を寄せる人々が、より明確な表示法を模索することも含め、ピート使用削減の取り組みを積極的に支援するための道を見出す「培養土イニシアティブ」の、主要なスポンサーとなっている。

## 5 王認園芸協会の取り組み<sup>6)</sup>

### 取り組むべき重要な役割

王認園芸協会は、培養土と土壌改良材におけるピート使用が0.7パーセント以下であり、ピートを使用しなくてもいかにすばらしい園芸の水準が達成できるかを示す役割を担っている。

王認園芸協会は、自らのピート消費を削減し、アマチュア、プロのガーデナーとナーセリーにピートを使わない園芸での知識と経験を共有して

もらうことで、できるだけ多くの人々にもそうして欲しいと促している。王認園芸協会の会員は36万人おり、毎年100万人がRHSガーデンを訪問している。園芸ショーには40万人の来場があり、毎月70万人が同協会のウェブサイトを訪れている。

王認園芸協会は、また培養土イニシアティブの主要メンバーであり、そこで製造業者、生産者、政府、非政府組織、生産者と環境保全論者が一緒になってピート削減の実践に取り組むことを積極的に支援している。

RHSガーデンでは

王認園芸協会のガーデンで、ピートが土壌改良材やマルチ資材として使用されることは決してない。代わりに毎年、堆肥化した刈り草や剪定枝、厩肥、バーク堆肥が、2000立方メートル以上、土壌改良資材およびマルチ資材として使用されている。

2010年に、王認園芸協会は7立方メートル足らずのピートをガーデンで使用したが、その一方で200立方メートルのピート不使用培養土を使っている。使われたピートは、繁殖用と、特殊な植物コレクションのためであった。王認園芸協会はピート使用を劇的に減少させてきた。すなわち、2001年段階では培養土としてのピート使用は131立方メートルであった。

王認園芸協会のガーデンスタッフと研究員は、この目的にかなった持続可能なピート不使用の培養土を見出すべく、鋭意研究を続けている。

常にRHSガーデンとフラワーショーで市民向けの展示と公開実験を行って、減ピートとピート不使用の製品の普及に努め、RHSプラントセンターには、簡単に識別できる代替培養土を常備していて、手ごろな価格で販売している。

## 王認園芸協会の科学と助言

王認園芸協会は、代替培養土の使用に関し、ガーデナーに最新の証拠に基づいた情報とアドバイスをインターネット上、出版物、助言サービスを通じて提供している。王認園芸協会の科学チームは、ピート不使用の代替培養土を研究している。この研究の重点は、最も重要な貢献を行うと信じられる部分、例えば生育用混合培養土や特定の目的に応じた培養土の探求に置かれている。

## RHSショーにて

王認園芸協会は、RHSショーの出展者がピート使用をなるべく少なくするよう支援している。とりわけ、演出目的でのピート使用は許していない。毎年、私たちはショーの出展者に調査を行い、ピート不使用培養土と減ピート培養土の使用状況をモニターしている。

## Ⅲ その他の園芸資材について

以上、ピートについて見てきたが、天然資源由来の園芸資材はピートばかりではない。ピート以外にも英国で、脱天然資源依存が進んでいることを見るために、ミズゴケとヘゴ、オスマンダ・ルートについて紹介して締めくくりとしたい。結論を先に述べるならば、これらの植え付け材料を英国であれこれ探してみたものの、これらを店頭で見るとはほとんどなかった。

ミズゴケは、気候が冷涼な英国では、平地であっても湿地の普通種である。その吸湿力を生かし、戦時中には、傷病兵の包帯のパッドに使われたこともあった。レディング市の拙宅近くの入会地にも小規模な群落はあったし、本誌7号でご紹介したロスチャイルドのカントリーハウス「エクスバリー」に近いニューフォレスト一帯では、見渡す限りのミズゴケ湿地のカントリーサイド・ウォークを楽しむことができる。なのに、市販の洋蘭の植え付け材として使われているのを見たことがないし、袋詰め製品の店頭販売を私が見たのは一度きりである<sup>7)</sup>。

園芸ショーでは、食虫植物専門業者のディスプレイで見ることがあった

が、そうした演出用途を別にすれば、ミズゴケは不人気と見えた。

どの園芸店でも輸入乾燥品の取り扱いがあり、100円量販店でさえ売られている日本とは、大きな違いがある。

あるとき、ニューベリー近郊で開催されたラン専門の展示即売ショーに向いたことがあった。展示品をそのつもりで確認していったのだが、ここでも植え付け材料としてのミズゴケは見る事が出来ず、パフィオペディラムなどの地生ランにはパーク、ファレノプシスなどの着生ランにはヤシがら繊維やチップが使用されていた。なんとミズゴケは、袋詰め販売すらされていなかったのである。環境保全への意識からか、線虫の問題や人間への健康被害が懸念されたのか。要因は不明だが、ミズゴケは、実態として英国市場に流通していない。

次にヘゴについて述べよう。

ヘゴといえば、かつて1970年代半ばから日本でポトス、ペペロミアのような観葉植物鉢が流行したときに、棒材が必ずと言ってよいくらい支柱に使用されていたものだが、これまた英国では見なかった。1990年代初頭にはすでに、こうした鉢植えには、合成樹脂の粗いネットで吸湿性のある繊維をくるんだ棒が使われていた。これは、ガーデンセンターでばら売りもされていた。

ところで、1990年代の後半に、南半球から輸入される温帯性ヘゴ *Dicksonia antarctica* が英国ガーデナーのあいだで流行したことがあった。これをもてはやす園芸番組もある一方、「この大きさに育つまでに原産地では数十年かかっている」と紹介する番組もあり、在来品のシダを柱状の台に植えつけて同様の観賞価値を狙った”ヘゴもどき”の作り方を紹介する番組もあった。

かように観賞価値の高いものを切り倒して園芸資材として使うなどのもつてのほか、ということだったのであろうか。板状製品は、日本では洋蘭を着生させているのを時折見るが、これまた英国では見なかった。この目的にはもっぱら、コルクが使用されていた<sup>8)</sup>。植木鉢の形にくり抜いたニュージーランド産のヘゴ鉢も、英国では見ないものだった。

もうひとつ、私の気になっていたのが、オスマンダ・ルートである。昭和30年代までに出版された和書には、洋蘭の植え込み材料としてこれを紹介しているものが多かった。オスマンダ(ゼンマイ)自体はシダ専門業者が、変わり物も含めて数種類取り扱っていたが、オスマンダ・ルートも昨今の英国でまったく見ないものであった。

ところが、アメリカのあるサイト<sup>8)</sup>では、洋蘭の植え込み材料としてオスマンダ・ルート、ヘゴのブロック、腐葉、バーク、ミズゴケ、ヤシがら繊維、竹チップ、かんなくずを紹介している。オスマンダ・ルートはイタリアからの輸入という。米英の園芸文化の違いを垣間見た思いである。

## おわりに

今でこそ日本でも、袋詰め混合培養土があれこれ商品化されて店頭に出回るようになったが、しばらく前までは鉢植え用土といえば、単品袋詰め赤玉土や鹿沼土などに腐葉土、川砂などを適宜配合し、ふるいでミジンを抜いて自分で調整するものだった。かたや英国の園芸業界は、酸度を調整したピートが膨潤で保水性・保肥性に富み、鉢植え用土としてすぐれた性質をもっていることに気づき、早くからこれを製品化してきた。土(ソイル)ではないから、コンポストである。John Innes の標準培養土が、有名な割に一般家庭でそれほど使用されないのも、ピートベースの汎用コンポストで大概の用が足りるからであろう。

ところが、かつて手掘りだったピートが大規模に機械採掘されて価格も安くなり、大量に使い捨てられるようになると、今度は環境破壊という別の問題が自覚されるようになってきた。泥炭湿地はもともと、人里から比較的遠い風向明媚な場所が多く、固有の植物や動物に富んだ独自の自然をはぐくむ湿原だったが、その景観が急速に、見るも無残な状況にかわり果てている。これが、本稿で紹介した取り組みの背景である。

王認園芸協会の、園芸界をリードするオピニオンリーダーとしての役割を、本稿では主に見てきた。また、本稿では紹介出来なかったが、IIで紹介したRHSサイトに名前の挙がっていた総合的環境保全団体「ナショナル・トラスト」の役割も重要である。

ただ、問題は、ピートの流通がヨーロッパ全域にまたがっていることと、とりわけ、ヨーロッパにおける花卉生産の中心が英国でなくオランダということである。ほとんどピート単用のコンポストに植え付けられたオランダ産の各種鉢花は、今もなお大量に英国も含めた欧州市場に出回っている。

私がここで思い起こすのは、ヨーロッパ各国で国際河川と北海の水質汚染が問題となった1950年代のことである。国別の努力では限界があるとして、環境問題への取り組みが一気に国際化したのがこの時代であった。ピート植えの安価な生産品で欧州市場を席卷しているオランダ花卉業界の既得権に対し、どこまで有効な制限を加えられるのか。今後のEUの取り組みが注目される。

## 注

1) Royal Horticultural Societyについては、漢字圏では一般に「王立」園芸協会との訳語が定着しているように見える（中国語でも王立園芸協会）。しかし、これは協会が王家により設立されたとの誤解を招きかねないため、筆者は、より適切と考える「王認」の語を使用している。

RHSは1804年に設立された民間団体で、設立時の名称はロンドン園芸協会 Horticulture Society of Londonであった。1861年にビクトリア女王の夫君で、時の総裁であったアルバート公の勅許Royal Charterにより、ロイヤルの称号を許されてRHSと改名し、現在に至っている。これは王制国家における格式認定の問題であって、ロンドン園芸協会の設立は王家のバックアップに導かれたものではない。同様に、英国で勅許によりロイヤルの名乗りを許された団体に、建築家協会RIBA、都市計画協会RTPIなどがある。

参考：<http://www.rhs.org.uk/About-Us/Who-we-are/History>

2) <http://www.rhs.org.uk/Gardening/Sustainable-gardening/Peat-and-the-environment>  
URL最終取得2013年1月19日（以下すべて同様）

3) <http://www.rhs.org.uk/Gardening/Sustainable-gardening/Peat-and-the-environment/More-about-peat>

4) <http://www.rhs.org.uk/Gardening/Sustainable-gardening/Peat-and-the-environment/Peat-alternatives>

- 5) <http://www.rhs.org.uk/Gardening/Sustainable-gardening/Peat-and-the-environment/Peat-and-the-gardener>
- 6) <http://www.rhs.org.uk/Gardening/Sustainable-gardening/Peat-and-the-environment/What-is-the-RHS-doing->
- 7) それはハンギングバスケットの中敷（ライナー）として、あざとい緑色に着色されたものであった。一般には、この用途にはハイゴケが使用されている。もちろん、ビニールや厚い不織布、ヤシがら繊維製品も多い。
- 8) コルク栓をワイン業者が使わなくなったために、地中海のコルク樫プランテーションが荒れて、生態系が悪くなっているというのは、1990年代後半らしい別の論議である。
- 9) <http://fuzzycookie.hubpages.com/hub/Beginners-Guide-to-Growing-Orchids>